

日本三景の松島を散策して

個人正会員 坂本 文夫



松島海岸駅を降り、海岸の景色を眺めながら雄島に向かった。この島は、今から約 300 年前、松尾芭蕉が奥の細道の際に塩竈から松島湾を船に乗って訪れたといわれている。雄島は古くから「奥州の高野」として僧侶・巡礼者の修行の地として知られており、僧侶が修行した跡や松尾芭蕉の碑が見られる。雄島から北の方角の小高い山の上に「西行戻しの松」と称される場所がある。この場所から観る松島湾は美しく、海に浮かぶ島々や観光船の航跡がはっきり見えるので、晴々とした気分させてくれる。

山を下ると、瑞巖寺の手前に観瀾亭（別名月見御殿）がある。この建物は伊達政宗が秀吉より拝領し、伏見桃山城の茶室を忠宗が原形のまま移築したといわれている。月見御殿から観る満月は格別で、月が出ると海面には月につながる道のように、月が真上近くに昇ると海は銀の波を立てて輝き、湾に浮かぶ島々や松の陰影が美しい。

瑞巖寺は 828 年慈覚大師により創建され、現在の建物は伊達政宗が 5 年の歳月をかけ、1609 年に完成させた桃山様式の荘厳な建物である。その本堂は平成の大修理が最近完了し、松尾芭蕉が「金壁荘巖光を輝し」と謳った豪華絢爛な障壁画は、見る人を虜にする素晴らしいものだ。

松島は瑞巖寺だけでなく、牡蠣の産地としても知られており、湾内のあちこちで牡蠣の養殖が盛んに行われている。牡蠣のシーズンは 10 月から 2 月であるが、この季節になると目につくのが牡蠣小屋である。そこでは、「牡蠣の食い放題」を大々的に営業しているので、牡蠣好きの人にとってはどうしても足を運びたくなる場所だ。

散策して気づいたことだが、海岸沿いの街並みは整然としており、津波被害の痕跡を発見することができなかった。他の地域では甚大な被害を被っているのに、この地域だけが被害が小さかったのはなぜなのか。その理由を地元の人に尋ねたところ、湾内に点在する 260 あまりの島々が津波をブロックしたため、その勢いが弱められ、大きな被害を免れたということであった。今回わかったことは、湾の地形や点在する島々が、押し寄せる津波の脅威から松島を守ったということである。このような状況下で、津波の勢いが弱かったとはいえ海面が上昇し、防潮堤から海水が越水して浸水被害を被ったが、この程度ですんだのは幸運だったといえる。



西行戻しの松から松島湾を望む

「馬鹿者」であり続ける

サポーター

一般社団法人 Water-n 代表理事 奥田 早希子



こんにちは。サポーター第1号の奥田と申します。肩書は上記の通りですが、その他にもいくつかあります。

- 編集オフィス chomo 代表（個人事業。フリーライター・エディター）
- 環境新聞契約記者
- 東洋大学 PPP 研究センターリサーチパートナー
- 下水道広報プラットフォーム企画運営委員

活動のベースには一貫して「水」があります。公害のひどい時期にひどい地域（阪神工業地帯に位置する尼崎市）で、汚くて臭いドブを見ながら育ったからです。「汚れた水をきれいにするのは難しい。なるべく汚さんように使って、きれいにしてから地球に還すほうが賢いやん」と小学生ながらに思っていました。

下水道は、水を還すための代表的なインフラです。整備が進んだおかげで、かつてのドブは今ではちゃんとした「川」になっています。この状況を、あわよくばもっと良くして次世代に還していかなければなりません。しかし、下水道の持続性には今、黄信号が点灯しかかっています。老朽化、更新投資の不足の恐れなど、新しく難しい課題が突き付けられているのです。

その解決策を考える時、気を付けていることがあります。それは下水道にこだわりすぎないこと。「下水道が下水道のために下水道を良くすることを考える」では、視野が狭くなってベストアンサーに行き着かないと考えるからです。近視眼的にならず、視点を高く、思考のウィングを拡げてゴールを意識するようにしています。「水環境を良くするため」というゴールは、ある程度まで水環境が改善された今となってはもはや時代遅れです。では、老朽化対策でしょうか？経営改善？どちらも違うと思います。それらは下水道の改善だけを考えているからです。私は社会福祉や地域活性化などと関連付けて考えるようにしています。「持続可能なまちづくりのために下水道に何ができるのか」。この視点こそが下水道のあり方をドラスティックに変革し、思いもよらない解決策に導いてくれると考えています。

そのことに気づかされたのは、東洋大学社会人大学院でした。「朽ちるインフラ」の著書で有名な根本祐二教授はじめ、リノベーションまちづくりで活躍されている清水義次先生などの下で、幅広く公民連携について学び、現場で実践されている多くの方々の生の声に触れました。「まちづくりは若者・馬鹿者・よそ者が変える」とよく言われますが、私はそれを清水先生に教わりました。どのような組織や業界にも当てはまる考え方です。若者でい続けることはできませんが、馬鹿者であり続け、水にこだわりながらもよそ者の視点を持ち続けたい。いろんな人が集まる CNCP は私にとって、そのための刺激を与えられ、思考のウィングを拡げる場でもあるのです。